



わが愛すべき 80年代映画論(第十回)

文章：かつお



『ベスト・キッド』

(原題：The Karate Kid) 1984年

Blu-ray発売中 ¥2,381+税
ソニー・ピクチャーズ エンタテインメント
監督：ジョン・G・アヴィルドセン
音楽：ビル・コンティ
出演：ラルフ・マッチオ、ノリユキ・パット・モリタ

練習前の道場の掃除、そして練習後の床の雑巾がけ。きっとこれも何かの役に立っていて、知らないうちに僕は強くなっているに違いない。全国の空手少年にそういった壮大な勘違いを生んだ伝説的な作品こそが、本作である。現実には道場の掃除費用の削減のためであろうし*1、鶴の舞からの前蹴りを繰り出しても昇段試験には受からない。少年たちは大人の階段を昇るにつれてそれを学んでいくわけだが、いずれにせよ、空手少年の胸を熱くし続け、大人になった今でも魂を揺さぶられる感動的な映画である。

ストーリーは、ニュージャージーからカリフォルニアに引っ越した母子家庭の内気なダニエル（ラルフ・マッチオ）*2が、同じ学校の女性アリといいカンジになったために、元カレであるジョニー・ロレンス（ウィリアム・ザブカ）に目をつけられるところから始まる。彼の軍団「コブラ会」という無慈悲なカラテ道場の生徒たちにしこたまリンチをされるダニエル。たまたま通りがかったアパートの管理人、日本人のミヤギ（ノリユキ・パット・モリタ）が一瞬で彼らを叩きのめす。このミヤギこそ、沖縄・剛柔流空手の達人であり、彼の指導を受け、ダニエルは少年カラテ大会に出場することになる。

凄まじいのはこの「コブラ会」。もともとしょぼい通信空手を学んでいたダニエルが興味本位でその道場を覗くと、師匠と弟子たちの以下のような怒号のやり取りが行われている。

*「Fear does not exist in this dojo, does it?」

（この道場に恐怖はないな、どうだ？）

「No, Sensei!」（センセイ、ありません！）

*「Pain does not exist in this dojo, does it?」

（この道場に痛みはないな、どうだ？）

「No, Sensei!」（センセイ、ありません！）

*「Defeat does not exist in this dojo, does it?」

（この道場に敗北はないな、どうだ？）

「No, Sensei!」（センセイ、ありません！）

森昌子が切なく歌う淡い恋心など吹き飛ばす「センセイ」連呼。尋常ではないブラック道場である。こんな奴らに、肉体はガリガリ君、精神的にもライトフライ級くらいのダニエルでは、万に一つも勝つチャンスはない。観客の誰もがそう考えていたところからの、ミヤギの特訓である…。

車のワックスがけ、床のヤスリ掛け、そして塀のペンキ塗り。完全なる管理人さんの雑用のお手伝い。これでは一体、どちらがブラック道場なのかと分からなくなる。ダニエルさんも分からなくなる。一体いつまでこんなことをさせるのか？ そうミヤギを問い詰めたところで、本作の最も感動的なシーンが訪れるのである。

「ワックスがけをやってみろ」。その言葉と同時に正拳突きを放つと、ダニエルは見事に、いわゆる空手の「掛け受け」の動きでそれを捌く。「床のヤスリ掛けをやってみろ」と言うや否や前蹴りを繰り出すと、ダニエルは見事に「下段払い」の動きでそれを捌く。ぽかんとするダニエルさん。圧巻である。「インフォームド・コンセント」。そんな欧米風の概念は、ここには存在しない。

「あれ？ そういえばオフェンスの練習は？」という観客の心配をよそに、管理人直伝の卓越したディフェンス技術でトーナメントを勝ち上がるダニエル。最後にはコブラ会の卑劣な足関節攻撃（反則）に遭うも、海岸でミヤギを真似て練習した鶴の舞からの前蹴りで見事にジョニー・ロレンスの顎を跳ね上げ、優勝

*1) あるいは100歩譲っても、精神鍛錬。

*2) DVD表紙画像参照

するのである。

余談だが、この鶴の舞。当時からして「こんな技あるかよ」と訝しむ自称・格闘ファンは多かったものの、これは中国福建省に伝わる「白鶴拳」という拳法のれっきとした技である。2011年4月、世界的な総合格闘技の大会であるUFC (Ultimate Fighting Championship) において、ミヤギと同じく伝統派空手を身に付けた日系ブラジル人リョート・マチダが、当時UFCのレジェンドとなっていたランディ・クルトウアを相手にこの鶴の蹴りを繰り出し、その一発でKOしてしまったことは記憶に新しい。

いずれにせよ、見事に優勝を果たし、「やったよミヤギ!」と叫ぶダニエルと、満足気な師匠のアップを観た時、さすがに涙しない男は皆無である。やはり本作、ラルフ・マッチオとノリユキ・パット・モリタの名コンビ、そして監督ジョン・G・アヴィルドセン、音楽ビル・コンティという『ロッキー』(1976年)の鉄板コンビが奇跡のコラボを果たしたからこそその名作…。いや、そんな平板な感想を述べるニワカ映画評論家が仮にいたとしたら、問いたい。全く同じ要素を引き継いだ『ベスト・キッド2』(1986年)の、でんでん太鼓以外何も記憶に残らないデタラメぶりと、『ベスト・キッド3』(1989年)の、もはやストーリー、キャラクターの何一つ思い出せないデタラメぶりは、一体どういうことなのかと。

ハリウッドの莫大な予算を使って行われたこの“マウスのノックアウト実験”で分かったことは、やはり「コブラ会」。その強烈な存在感と、それをベースとしたスクールカーストの爽快な下剋上。これこそが、この第一作をデタラメ続編群と隔て、永遠に残る名作たらしめている、ということであろう。やはり「最高のヒーローは最高のヴィラン(=悪役)がつくる」*3(かつお2017)である*4。

ちなみに、海外留学経験を持つ官僚諸兄であれば、ダニエルさんや少年空手トーナメントのアナウンサーが度々「ミヤジ」と発音をしていることにお気づきになるであろう。「Miyagi」。このスペルでは、英語圏

の人間には「ジ」だ。「Igの合議はこちらにもお願いします。」などを拙い英語力で「Please Aigi of Ig come here」などと言おうものなら、外国人さんの頭は大混乱となる。こうした英語での国際交渉の難しさを教えてくれるところも、本作の魅力である。

いずれにせよ、この4月に新たに入省した新人諸君には、コピーとりや「ポキポキ」作成の一つ一つも、何か特別な訓練になっていて、それ故に補佐は私に命じているんだ、という心を(真実はどうあれ)いつも忘れないでいて欲しいことは、言うまでもない。

*3) 最近のわちゃわちゃしたスーパーヒーロー映画ではヒーローの個性が強烈過ぎて、映画序盤の初登場からだいたい映画が終盤になる2時間後にはあっさりくたばるヴィランのダサさをみてイマイチ盛り上がりえない経験をした人もいるのではないかと。マーク・ハミルという特に個性のない少年を映画史上最高のヒーローたらしめたのは、映画史上最高のヴィラン「ダース・ベイダー」であったことを疑う80年代映画ファンは皆無であろう。

*4) アメリカのドラマなどで時折、ジョック(=スクールカースト上位者)のいじめっ子を指して「Cobra Kai」と揶揄するセリフを耳にするが、かように一般名詞化していることも、読者諸兄には常識であろう。